その他の主な皮膚悪性腫瘍

皮膚にできる血管肉腫

筑波大学医学医療系皮膚科　藤澤　康弘

KEY WORDS
●血管肉腫
●皮膚
●予後
●治療

Cutaneous angiosarcoma.
Yasuhiro Fujisawa（講師）

はじめに

血管肉腫は全軟部肉腫のうち１％を占めるに過ぎない非常にまれな腫瘍であるが，そのなかで最も多いのは体表に生じる血管肉腫であり，血管肉腫全体の33％を占める。系統的な統計が取られていないため正確な数字は不明だが，実際の症例は非常に少なく，皮膚腫瘍を扱っている大学病院クラスの施設でも新規症例は0.35～0.6例／年に過ぎない[1)2)]。本腫瘍は進行が早いため，集学的な治療を行っても５年生存率は10％未満と非常に予後不良である[2)]。皮膚科でも遭遇する機会が少なく，一般的には疾患の認知度が低いことから，正確な診断までに時間を要した症例もしばしばである。本稿において本腫瘍についての基本的な知識とともにその臨床像を紹介することで，この腫瘍についての認識が広がれば幸いである。

Ⅰ．分類

皮膚に原発する血管肉腫は以下の３つに大別されるが，病型間に組織学的な違いはない。

①皮膚血管肉腫：高齢者の頭頸部に発生する血管肉腫で，体表にできる血管肉腫全体の半数以上を占める。打撲や外傷などが先行する症例が３割程度あるとされ[1)]，傷がなかなか治らないという訴えで受診する症例があることに注意する必要がある。なお，臨床所見については次項で本病型の症例を中心に紹介するので，そちらを参照されたい。

②リンパ浮腫に伴う血管肉腫（Stewart-Treves syndrome）（図１A）：1948年にはじめて乳癌術後のリンパ浮腫に続発する血管肉腫として報告されて以来，300例あまりの報告がある[3)]。本病型の９割以上が乳癌術後であるが，基本的にリンパのうっ滞を起こす疾患であれば発症する可能性があ

SAMPLE
Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.